

植村氏が和牛の輸出拡大へ向けた取り組み紹介―産業展セミナー

第45回食肉産業展(千葉県・幕張メッセで開催)の「食肉情報セミナー」で10日、日本畜産物輸出促進協議会の植村光一郎理事(株)ミートコンパニオン常務取締役、写真)が「和牛の輸出戦略〜コロナ後もさらに広がる世界マーケット〜」と題し、講演した。



植村氏は、農水省が掲げている25年目標値は1600億円と述べ、計算すると、ロインセットだと24万頭分が必要になり、ロイン以外だと4万頭が必要になると説明。21年11月現在の牛個体識別番号による黒毛和種の頭数は170万頭。和牛はホルスタイン種に受精卵を移植することで和牛を増やすという取り組みも進めているとした。また、和牛のA5等級の発生比率が、07年は16・3%だったが、20年は49・5%だったことから「トリュフを単なるきのことして試してみないように、和牛も牛肉を超越したものだ」というものとして輸出に取り組むべきだ」と強調。

続いて、過去のプロモーション活動を説明。13年のシンガポールでの初プロモーションで「日本国内でも和牛の霜降りについて『脂を染み込ませたスポンジだ』という料理人もおり、ほとんど人が集まらなかったのが手をあげてアピールした」とし「この時は日本の和牛より、豪州産WAGYUが注目を集めていた」と述べた。このため同年のニューヨーク開催で、和牛の霜降りのみた目について脂が多いとされることを懸念したが、実際には「芸術的で、とろける」と評価されたとし「和牛は全世界、どこに行っても負けないと感じた」と強調。14年のベトナムレセプションでは、初めて林農水大臣(当時)がトップセールスで参加するほど、日本政府も力を入れ始めたことを説明。また同年、EU輸出解禁直後の英国の高級百貨店ハロッズで、まだ店頭に並んでいないはずのWAGYUと書かれた精肉が販売されていたとし、15年1月ごろに本物の和牛肉が置かれたとした。

解禁後は、ニューヨークタイムズで最も良い肉が置いてあると評価されたパリの食肉専門店「イブ・マリ・ル・ブルドネック」で早速、和牛が置かれてあり、嬉しかったと振り返った。15年には、和牛の知識が高いベトナムで、43スペックの商品化について実践。アジアは価格志向が強く、ロース以外の部位をカットして使うことによって輸出量が伸びるとした。16年にはミャンマーでスライス肉を広める活動をしたほか、アブダビ(UAE)では、ムハンマド皇太子が来場し、評価されたとした。19年にはパリで星付きレストランシェフに各部位を紹介。そのほか海外バイヤーを招致したイベントや、生産拡大を呼びかける生産者との交流、また獣医学術学会でも和牛のプロモーションへの協力を要請。畜産系大学では和牛の将来性について説明したほか、ことし3月には品質が高い石垣牛の販売拡大を推進。「売るだけではなく、生産振興や、将来性についてもPRしている」と植村氏は力強く述べた。